漢方診療所を受診する患者像について

—渋谷診療所における動向—

中 村 久美子*, 稲 木 一 元**, 田 中 一 朗*
高 梨 久 恵*, 山 田 光 胤**

Profile of the Patients Consulting A KANPO
(Japanese Traditional Medicine) Clinic

Kumiko NAKAMURA*, Kazumoto INAKI**, Ichiro TANAKA*
Hisae TAKANASHI* and Terutane YAMADA**

Abstract Only a few years have passed by since the national health insurance began to be applied to the KANPO treatments. In order to grasp the patients profile of KANPO treatments, 3,156 patients who consulted Shibuya Clinic from the 1st of December in 1981 through the 30th of November in 1982, were analyzed. As the result; (1) in the respect of sex-age distribution in number, middle-aged female were most frequent. (2) the classification of chief complaints associated with the sex-age distribution seemed to suggest that the symptoms might change by aging from those of the upper respiratory tract or the skin lesion to arthralgia or lumbago, from the surface to the deep, or from the upper to the lower part of the body. we also tried to compare the result with this kind of reports of the others.

要旨 漢方保険診療が行われるようになってからまだ歴史が浅い。そこで、昭和56年12月1日から昭和57年11月30日までの1年間に渋谷診療所を受診した3,156名の患者像・病像を他診療所と比較してつかんでみた。年齢・性別分布における受診者数では、中年女性が多かった。居住圏においては、一般通院よりはるかに広い。主訴の年齢・性別分類では、年齢増加により、喉や鼻あるいは皮膚症状から、関節痛や腰痛へと、変化している。

緒 言

健康保険で漢方薬が使用されるようになり、エキ剤等が普及しつつある。そこで、漢方保険診療所を受診する患者像をつかみ、他診療所との比較とあわせて、その主訴の年齢・性別分類から年齢増加に伴う病像の変化の類推を試みた。

対象と方法

対象は昭和56年12月1日から昭和57年11月30日までの1年間に渋谷診療所を受診した患者3,156人（男1,201人女1,955人）および昭和58年7月1ヵ月間の初診患者数262人。方法は、①年齢・性別分布分析、②居住圏について昭和57年9月1ヵ月間の

*薬, **医, 日本漢方医学研究所附属渋谷診療所, 東京。

*Pharmacist, **M.D., Japan KANPO Medicine Research Center Shibuya Clinic, Tokyo.

(昭和56年12月1日～昭和57年11月30日)

表1 受診者の年令・性別分布

(昭和56年12月1日～昭和57年11月30日)

図1 受診者の年令・性別分布

性別	比率	人数	性別	比率	人数
男性	38.1%	1,201人	女性	61.9%	1,955人
0代	14.1%	169人	0代	4.8%	93人
10	9.8	117	10	5.9	116
20	12.9	155	20	18.4	361
30	15.5	186	30	19.8	388
40	17.2	207	40	20.7	404
50	16.1	193	50	18.4	360
60	10.2	123	60	8.4	164
70	3.7	45	70	3.4	66
80	0.5	6	80	0.2	3

表2 北里研究所附属東洋医学研究所における受診者数¹⁾

患者総数	448人
男性	193人 (43.1%)
女性	255人 (56.9%)
年齢別の比率	
男性	60代 (17.6%)
	40代 (16.6%)
	50代 (14.5%)
	30代 (14.5%)
	以下略
女性	40代 (21.6%)
	50代 (21.6%)
	30代 (18.4%)

表3 埼玉医科大学第1外科における患者数⁷⁾

初診時年齢	男	女	計
1～9歳	3人 2.2%	2人 1.2%	5人 1.6%
10～19	11 7.9	6 3.6	17 5.6
20～29	23 16.5	27 16.4	50 16.4
30～39	25 18.0	44 26.7	69 22.7
40～49	31 22.3	30 18.2	61 20.1
50～59	18 12.9	28 17.0	46 15.1
60～69	12 8.6	16 9.7	28 9.2
70～79	12 8.6	12 7.3	24 7.9
80～83	4 2.9	0 0.0	4 1.3
計	139人	165人	304人
平均年齢	42.5歳	42.8歳	42.7歳
性差	45.7%	54.3%	

受診者および昭和58年7月1カ月間の受診者の分布を分析、③主訴の年令・性別毎の順位の分析の3点について行った。

結果と考察

1) 受診者の年令・性別分布 (図1・表1): 性別では女性が多く、全体の61.9%を占め、そのうち41～50才が404人でもっとも多く、次いで31～40才となり、男性でも41～50才がもっとも多い。北里研究所附属東洋医学総合研究所 (表2) と埼玉医科大学第1外科 (表3) のそれぞれの患者数を比較すると、共通して全体的に女性が多く、これは更年期障

害など西洋医学で処置しにくいと思われる症状が多いためと推測される。また、当診療所では、若年層にもピークがあるのが特徴的で、幼児期においては男性のほうが、病気にかかりやすいと推測される。

2) 受診者の居住圏 (図2・3): 調査結果について、図2の如く、昭和57年9月および昭和58年7月の2回におけるそれぞれの比率には、それほど差がないがやや渋谷区近辺が増加している。全体的にはかなり広い居住圏である。通院に要する所要時間を調べてみると、図3の如く、1時間以上1時間半未満がもっとも多く、一般通院¹⁰⁾と比べ合わせてかなり広い。これは、漢方専門の保険診療を行って

図2 渋谷診療所における居住圏の割合 (%)

図3 所要時間の構成割合 (%) の比較

表4 主訴の順位

男性 (1,201人)			女性 (1,955人)		
1.	咳	70人	1.	湿疹	102人
2.	疲労倦怠	66		関節痛	102
3.	鼻漏	64	3.	疲労倦怠	69
4.	鼻閉塞	51	4.	頭痛	67
5.	排尿異常	40	5.	発疹	65
6.	胃痛	39	6.	肩凝り	64
7.	高血圧	38	7.	月経異常	62
8.	呼吸困難	36	8.	便秘	60
9.	発疹	35	9.	排尿異常	54
10.	湿疹	31	10.	鼻漏	49

表5 主訴の順位

(男女合計)		
1.	疲労倦怠	135人
2.	湿疹	133
3.	関節痛	120
4.	咳	118
5.	鼻漏	113
6.	発疹	100
7.	排尿異常	94
8.	頭痛	86
	胃痛	86
10.	鼻閉塞	83
	肩凝り	83

いる診療所が相対的に少ないためと推測される。

3) 主訴の順位 (表4・5): 患者の初診時の主訴で、総合では、1位が疲労倦怠、2位が湿疹、3位が関節痛となっているのに、男女別では、1位が

男性が咳、女性が湿疹と関節痛でかなり違った傾向を示している。

4) 主訴ごとの年齢・性別 (図4～6): 疲労倦怠では21～30才の女性が多めで、次いで31～

図4 疲労倦怠

図6 関節痛

図5 湿疹

40才の男・女で、平均年齢は41.4才。男性・女性とも、ほぼ同じような傾向を示し、性による差はあまりない。低年齢層に多く、現代人は、ストレスなど体力的に疲労している人が多い。湿疹は、21~30才の女性が多かった。次いで31~40才の女性で、平均年齢は27.3才。女性では、皮膚の異常に敏感で気になる年代である。男性では0~10才が多かった。次いで11~20才で、比較的若年層に多い。関節痛は、51~60才の女性が多かった。次いで41~50才で圧倒的に女性に多い。平均年齢は50.7才。比較的高年齢層の女性に多い。男性は51~60才が多かった。全体的にかなり少なく、性差がはっきりしている。痛みは女性のほうが敏感であると

推測される。

5) 主訴の年齢階級別順位(表6・7): 男性は、0~10才は咳、鼻閉塞、11~20才は、鼻漏、鼻閉塞、21~30才は、胃痛、疲労倦怠、31~60才は、疲労倦怠、次いでそれぞれ、咽頭痛、鼻漏、高血圧、61~70才は、高血圧、排尿異常、疲労倦怠となっている。年齢増加に伴い、咽や鼻や皮膚症状の上半身から胃痛や腹痛などを経て、排尿異常¹³⁾¹⁵⁾などの下半身へ、上焦から中焦、中焦から下焦へと移っていく。また、成年以上では、心身症を思わせるような主訴も多くみられる。女性は、0~10才は、咳、鼻漏、11~20才は、湿疹、発疹、21~30才は、月経異常、発疹、31~40才は、湿疹、月経異常、41~70才は、関節痛、次いでそれぞれ、湿疹、肩凝り、腰痛、71~80才は、高血圧、咳と排尿異常、81~90才は、不眠、便秘、腰痛となっている。年齢増加により、喉や鼻や皮膚症状から、20才前後では、月経異常、それ以後は、関節痛や腰痛へと変化している。これらは、西洋医学では治療が不得意な症状と考えられる。また、男性と女性では、若年階級には差がないが、成年階級以上から、かなり違った主訴が表われている。女性に特有の月経に伴う主訴が、とくに多い。厚生省の国民健康調査⁹⁾では、傷病分類別にみた有病率で、主訴による分類ではない^{1)~7)12)14)}ため、比較検討ができないのが残念である。

表6 主訴の年令階級別順位(男)

総数1,201人

年令 順位	0~10	11~20	21~30	31~40	41~50	51~60	61~70	71~80	81~90
1	咳 (28)	鼻 漏 (19)	胃 痛 (13)	疲労倦怠 (17)	疲労倦怠 (13)	疲労倦怠 (11)	高血圧 (9)	排尿異常	排尿異常
2	鼻閉塞 (19)	鼻閉塞 (11)	疲労倦怠 (11)	頭痛 (9)	鼻 漏 (10)	高血圧 (10)	排尿異常	疲労倦怠 (4)	高血圧
3	鼻 漏 (16)	発 疹 (8)	咳 (10)	高血圧 腰痛 胃 痛 (7)	腰 痛 (9)	咳 痛 痒 (7)	疲労倦怠 (7)	動 悸 (3)	浮 腫
4	排尿異常 喘 喘 (14)	痔 瘻 腸 痛 淫 疹 (7)	鼻閉塞 (9)	高血圧 肩凝り 胃 痛 (8)	高血圧 肩凝り 胃 痛 (8)	(7)	視力障害 咳 胃 痛 (5)	高血圧 冷える 便 秘 関節痛 頻 重 (2)	麻 痺 疲労倦怠 (1)
5			鼻 漏 (8)						

() は人数

表7 主訴の年令階級別順位(女)

総数1,955人

年令 順位	0~10	11~20	21~30	31~40	41~50	51~60	61~70	71~80	81~90
1	咳 (12)	淫 疹 (21)	月経異常	淫 疹 (22)	関節痛 (29)	関節痛 (29)	関節痛 (18)	高血圧 (7)	不 眠
2	鼻 漏 (8)	発 疹 (12)	発 疹 (29)	月経異常 (18)	淫 疹 (18)	肩凝り (20)	腰 痛 (14)	咳	便 秘
3	鼻閉塞	月経異常 (9)	淫 疹 (27)	疲労倦怠 (17)	肩凝り (17)	頸 痛 (18)	高血圧 (7)	排尿異常 (5)	腰 痛 (1)
4	呼吸困難	鼻閉塞 (8)	疲労倦怠 (20)	頸 痛 (16)	便 秘 (15)	項部・肩 の疼痛 胃 痛 胃のもた れ	便 秘 (6)	頸 痛 (4)	
5		淫 疹 (7)	排尿異常 (7)	鼻 漏 便 秘 (13)	鼻 漏 肩凝り (13)	頸 痛 (14)	高血圧 (12)	肩凝り 咳 冷える 排尿異常 疲労倦怠 (5)	

() は人数

結 語

1) 保険漢方診療所においては、①中年女性の患者がもっとも多い。②患者の居住圏は、一般診療所よりはるかに広い。

2) 主訴の年令・性別分類は、①加齢による病像の変化を類推させる。②男女では著しい差がある。

(本論文の要旨は第34回日本東洋医学会学術総会で発表した。)

文 献

- 1) 谷口千津留, 他: 北里研究所附属東洋医学総合研究所における漢方外来の状況, 日本東洋医学会誌, 25巻4号, p.37, 1974
- 2) 高橋国海: 中將湯ビル診療所において投薬された漢方について, 日本東洋医学会誌, 32巻1号, p.35, 1981
- 3) 寺沢捷年, 他: 富山医科薬科大学附属病院和漢診療室の1年の歩み, 日本東洋医学会誌, 32巻2号, p.39, 1981
- 4) 有地滋, 他: 近畿大学東洋医学研究所診療部門にお

- る漢方外来の現況, 薬局, 34巻2号, p.77, 1983
- 5) 千葉大学東洋医学研究会: 東洋医学実態調査中間報告, 漢方の臨床, 23巻4号, p.14, 1976
- 6) 千葉大学東洋医学研究会: 東洋医学実態調査アンケート調査第二報, 漢方の臨床, 24巻5号, p.3, 1977
- 7) 関正威, 他: 当科における漢方製剤による治療経験と漢方医学の小史および将来の展望, 埼玉医科大学雑誌, 9巻3号, p.251, 1982
- 8) 堀越勇, 他: 和漢調剤の実際, 医薬ジャーナル, 18巻7号, p.61, 1982
- 9) 厚生統計協会: 有病率, 国民健康調査, 昭和56年, p.30, 1983
- 10) 厚生統計協会: 医療機関までの所要時間, 国民健康調査, 昭和56年, p.30, 1983
- 11) 厚生統計協会: 自覚症状, 保健衛生基礎調査, 昭和55年, p.14, 1982
- 12) 安宅久成, 他: 病院薬局における漢方製剤の使用動向, 医薬ジャーナル, 19巻7号, p.89, 1983
- 13) 重広補注: 黄帝内経素問, 上海商務印書館(築地書館), p.4, 1971
- 14) 本邦臨床統計集, 日本臨床, 41巻, 増刊, 1983
- 15) 宋・銭乙: 小兒藥証直訣, 旋風出版, p.107, 1967

(1983年10月19日受付)